

要望をなすべきである。

第二に内部的には、私情を捨て、藝道の爲に力を致すべきである。私情を捨て、といふのは、織大夫の如き實力のある大夫は、たとひ自分の弟子であるからとて、遠慮せずに登用すべく、然らざるものは、顔や交友關係に拘らず、退けて用ひざるを言ふのである。

第三には、若い大夫の藝術上の待遇問題である。十年前までは、大序を大勢の大夫が分擔して語つてゐたが、あの制度を復活し、併せて新人の登用をして欲しい、その爲には本興行の開幕三時間前から、大夫三絃人形の若手の人達による練習的無料興行を行ひ、當日の本興行入場券所有者を招待して見せて貰ひたい。その演し物に本興行の立狂言の大序序切二段目等を見せて貰へれば、こちらも嬉しい。

第四に、これは會社も儲かることだから、是非實行して欲しい。それは大夫の名前替である。由緒ある大夫の名前は、それが斯道修行の目標となつてゐるだけに、他の藝部門の名前とは違つて、それをつぐ大夫の責任は誠に重大で、未熟な大夫が立派な名前をつぐことが、斯道墮落の原因となり得るのである。既に先の染大夫は古來由緒ある染大夫を泥土に委したが、今日の○大夫、×大夫もその例に洩れぬ。又、由緒深い名ではないにしても、○○大夫□大夫等も、名人上手の仕上げた名前を毀すものである。又、そんな偉い名前の大夫

に對しては、絃下も指導の方法がないだらうと思ふ。そこでそれらの名前を一級づゝ下げて貰ひたい。これは突飛なやうだが、先例があるから希望するのだ。即ち今の呂大夫は由緒ある島大夫を返上して、呂大夫に變更したのだ。呂大夫の藝には感心したことのない私も、この心掛には心から感服してゐる。會社としては、名前が上らうが下らうが、襲名改名で團體が出来て、お客が來て、お金が儲かればそれでよいのだから、これは最も實現の可能性の在る要求だと思ふ。

一六・一二

吉 永 孝 雄

豊竹古靱大夫の文樂櫓下襲名は、その實力から言つてもかつぶくから言つても、年齢から言つても當然なるべき人がなつたと言へる否、何れかと言へば遲きにすぎた感じがする。實に堂々たる貫祿の、何等の不安を與へぬ櫓下である。そして義大夫愛好家の待ちに待つて居るその披露興行が新春一月に華々しく行はれる。一體何を出すであらうか。「引窓」か「寺小屋」か、「野崎村」か、「日向島」か、それとも「熊谷陣屋」かと愛好家は色々と自分勝手な想像をほしいまゝにして暫し楽しい一時を過ごした事であらう。

この時、この夢を破つて突如、米英膺懲の火蓋が切つて落された。忝くも宣戦の大詔下るや、間一髪を入れず、ハワイの一大奇襲となり、ヒリツピン、マレーの攻略となり、開戦初頭、皇軍は米英兩國の太平洋艦隊とその航空勢力とを一舉に撃滅して南太平洋の制海權制空權を握つてしまつた。更に敵航空基地たるグワム、ウエーキ島を占領し、阿片戰爭以來東洋侵略の百年の牙城たる香港をも屠つた。今や皇軍は怒濤の如くマニラ、シンガポールに殺到し、銃後一億は火の玉となつてこの世紀の大戰爭に突撃を開始した。我等の耳は、心はびたんと南の新戰場に吸ひつけられるやうに向けられてしまつた。

この時に當つて古靱大夫は得意の熊谷陣屋をひつさげて颯爽と文樂の舞臺に立つ、期待に背いてわきの方を向いてしまつた聞き手、光秀ならぬ流石のこの人も暫し茫然とならざるを得ないであらう。どこまでも運の悪い人だと言へば言へるが、今迄重なる苦しみに打かつて來た人だけに、考へ方によつては、その櫓下披露に誠にふさはしい時機であるとも言へる。敵國の爆彈が何時大阪の眞中に落されるかもわからぬ時であれば、文樂座が今迄通り、大入満員を續けるか、どうかは、疑問であるが、例へ、入りがどうであらうとも氣を腐らさずに泰然自若として、この藝術の殿堂を守つて頂きたい。若い人でこんな時代に、今からこの道に飛込む人は絶無であ

らうが、せめては文樂座に立籠る人々の指導統率に全力を盡くして精進して貰ひたい。次々に報ぜられる戦勝に興奮の坩堝にある國民も、やがては必ず元の冷靜に歸るであらう。そして愛すべきものは愛し、守るべきものは必ず守り續けてゆく。若し今こゝで文樂が世間から忘れられるなら、——私は如何なる戦局の推移も古靱大夫の健在である中は榮三の目の黒き中は新左衛門ある限りは文樂座は搖ぎなき事を確信するものであるが——それは時局のせいではなくて文樂當局者及び櫓下である古靱大夫の責任であると思ふ。本當に價値のあるものなら、如何なる時代にならうとも必ず心ある國民の魂を捕へてゆく。古靱大夫よ、こゝ天下分け目の天王山と斯道の爲命がけの奮闘をして頂きたい。

同僚が、續々と戰場にゆく。何時召されるかも知らない私は、しきりと、この頃この國と、この命と、この命の後繼者のことを考へさせられる。そして最後にきまつていとし子を學問と藝術とを愛する人とせよとわが妻に遺言して戦場の華と散つた太田慶一伍長の心事をゆかしく、涙ぐましく思ひ起こすのである。「一、算之介、仲二、共いかなる職業につくとも學問と藝術とを愛する事を忘れざる様訓育すべし」と云ふ遺書の前に膝を正すのである。戦争が長期に亘り血腥く殺伐な生活に人々が慣れ、ば慣れるだけ人間としての潤ひが望ましいが、國民にこの心ある限り美しい藝術は必ずやこの日

本の國に花と咲く。一體、口を酸くして大東亞の建設を説いても、それが文化を抜きにしては何の意味もなさない。その文化も正しい學問と豊かな藝術との基礎の上に立たねば果敢なく消えてゆくものである。古靱氏よ、例へ大衆の心がどちらに向かうとも、この美しくも尊き藝術の殿堂を命を投げ出して守りつゞけて頂きたいと願はずにはゐられない。幸ひ、氏には太宰先生、鴻池氏、武智氏、中野氏、その他幾多の熱心な理解者があつて、この點、氏の努力も精進も、決して無駄には終らない。氏が跡つぎのかけがへのない御令息を失はれた五月興行の時にも一日も欠かさず舞臺を守つて、「十八年の春秋を」とあの太十を語り續けられた悲壯な尊い姿をこの目で見て、止めようとして涙の止まらなかつたあの時の感激を忘れることは出来ない。あの熱、あの愛を以て精進して頂きたいものである。

次に、これは私個人の勝手な希望であるが、古靱大夫に望むと言ふよりは、古靱大夫を中心として本誌で次の様な事が進められたいと考へてゐる。

(一)古靱大夫の自傳を出して貰ひたい。氏は十二歳の明治廿二年十月御靈文樂座へ竹本津葉芽と名乗つて出演されてから今日迄番附は一枚かゝさず持つて居られるのであるから正確この上ない姿を知ることが出来る。幸ひ吉田榮三氏の自傳を編まれた鴻池氏は大の古靱眞員であられるし、系統をたてゝ氏に話して頂くには、それ相當の準備が必要であるから一度

御經驗済みの鴻池氏は我々のする何分の一かの時間と努力とで仕上げられることは疑ひなしである。

(二)氏の藝談を出して貰ひたい。自傳には當然附隨して來ることゝ思はれるが、出来るだけ、その得意の語り物に就いて古靱氏の話を書きとゞめて置きたい。嘗て「上方」誌上へ大毎の山口廣一氏が載せられた「寺子屋の語り口」のやうなものが五六十篇あればどんなにか斯道に裨益することだらう。通例、藝談は勝手な自慢話や、一人よがりの苦心談が多く、興味をそゝられるものであるが、眞に研究に役立つものは少ないやうに思ふ。その場その場の場の思ひ付きや、責任のない氣まぐれ話が多いからである。この點古靱大夫には専門の學者も及ばぬ讀みの深さ、探究の廣さがあるから、他の人のやうににが／＼しく笑止に思ひ乍ら仕方なしに途方もない知つたかぶりを聞かされるやうな心配は少しもない。山口氏は相當集めて居られるやうに聞いてゐるが、思ひ切つてその玉手箱を發表して頂けないものか。文樂座で語られる作品は一番深い研究を積まれたものに違ひないからせめては月に一篇づゝでも篤志家が古靱氏の話を聞いて本誌にのせて頂けないものか。

(三)進んで古靱氏の語る大夫としての解釋と同時に聴き手の側として太宰先生のすぐれた鑑賞を出来るだけ詳細に拜聽する事が出来たらどんなに有難いであらう。何時か大學新聞で拜見した古靱大夫の語つた染分手綱に對する御批判の鋭さは

狭い見聞の私には藤村作先生以來の事である。すつかり感激して讀んだ事を覚えてゐる。誰が何と言つても先生程深い古靱大夫に對する御理解を寄せて居られる方はないから、斯道の爲御多忙の時間を割いて文樂座の舞臺で掴みとられた古靱大夫の藝を天下に闡明して頂きたい。

(四)藝談と鑑賞とに並行して古靱氏の語られる時は何時でも榮三、文五郎さんが人形を遣はれるに違ひないから今後大西氏は御苦勞でも人形の覺書をとつて頂きたい。尤も、とる立場が違つて居たからでもあるが榮三さん一人の覺え書では充分舞臺が再現出來ないから、全部の人形の覺書をとつて貰ひたい。その上尙出來るならば、中央公論などに載る時には結果は兎も角として相當自由に舞臺を各角度から寫眞にとつてゐるやうであるから出來る事と思ふ——人形の動きを示すに必要な舞臺寫眞を十枚づゝ位撮つて載せて頂きたい。

(五)本文の校訂注釋には近くに野間氏が居られるから正確の上ないものが出来る。

(六)古靱氏の藏書目錄を天下に發表して頂きたい。藏書家としての氏の存在を知らぬ者は一人もなく、又その貴重な藏書を拜借して多くの研究家は感謝してゐるのであるが、祐田氏の様な篤志な研究家の手を煩はして本誌に發表して頂きたいものである。更に斯道研究に必要な丸本番附評判記の類で同氏の所のないものも次々と野間氏や祐田氏の力でその所在がはつきりされたら、どんなにこの道の爲慶賀すべき事であらう。

以上みだりに先輩の名をあげて失禮の極みであつたが、本誌で實行出來る範圍で希望を述べたのである。

私は何時も巨大な體軀にもかゝはらず、古靱大夫の動作に女性的な匂を感じる。舞臺に出てばら／＼と美しく床本の頁を繰つて目的の所を開くとヤ、左肩をさげるやうにして體を眞直ぐにして、さて一寸細目で見物を氣にするやうに見られる所にも——決して、氣にして居られるのではないのだが——神經の繊細な人であることを感じてふと自分の錯覺かと思ふ何時か前に立派な湯吞が置かれてあつたがその後ろに今一つ湯吞があつてその湯吞の湯をきまつた所できつと飲まれるのを見て、氏の細かい心くばりを感じた。こんな事は本筋に係のない事で鴻池氏に中央公論誌上の文樂の大夫と三味線引きとの下駄箱同様一喝されさうであるので止める。

繰り返して言ふが古靱氏の讀みの深さとやむ事を知らぬ研究と精進とは人によつては、その爲、却つてこせつとか、ゆとりがないとか、暗いとか批評する人もあるが、何處迄も「これが正しいと言ふ信念」を持つて語つて頂きたい。——更にその上立派な藏書とは兎に角多くの斯道研究家を喜ばせ満足させ、その支持をうけて居られる。こゝに古靱大夫の強みがある。どうか斯道の爲風邪を引かないで——この言葉を子が親に對する願ひとして馬鹿にしないで聞いて頂きたい——奮闘して頂きたい。